

曖昧さへのトレランス—イントレランス の基本的相違点に関する研究

吉 川 茂

I 問 題

曖昧な刺激事態に直面したときに、適応的に反応ができる人と混乱に陥る人との差異は、いったいどのような心理的特性の差異によるのであろうか。

この論文の目的は、曖昧さへのトレランス (Ambiguity Tolerance) の成立に関係するいくつかの要因をより総合的な視点から関連づけることと、自我のより適応的な構造と機能を適切に反映する特性の1つとして曖昧さへのトレランスを位置づけることの妥当性を検討することである。

曖昧さへのトレランス—イントレランス (Ambiguity Tolerance—Intolerance) に関するこれまでの研究の変遷を概観するとき、現在もっとも考慮されるべき問題として、曖昧さへのトレランスはどのような心理構造をもち、どのような過程によって成立するのかという問題が提出される。この概念が発表されて以来35年あまりも経過したにもかかわらず、こうしたかなり初歩的とさえ思われるテーマが問われなければならない背景には2つの理由がある。

1つには、曖昧さへのトレランスに焦点をあてた研究はわずかしがなく、ほとんどの研究はイントレランスを中心にした立場からであったことがあげられる。Crandall, J. E. (1969) はイントレランスにばかり偏向しすぎてきた研究の動向に反省を促し、つぎのように述べている。「曖昧さへのトレランスは、イントレランスとちがって、ほとんど顧みられてこなかったが、イントレランスと同じく

重要な変数である。曖昧さへのトレランスについては概念さえいまだ曖昧であり、使用されるメジャーによって大きく左右され、測定されたトレランスの高得点には、さまざまな人々のまったくさまざまな特性が反映されているかもしれず、それは曖昧さを喜んで受け入れるという内容とは関係しない。」

イントレランス研究に比べて、直接トレランスに言及した研究は数少ないのだが、こうした現状に至った経過について以下簡単に触れておきたい。

曖昧さへのイントレランスという概念は、Frenkel-Brunswik, E. (1948) が権威主義や偏見を強くもつ人々の特徴を総合して端的に表現したものであり、主要な関心はイントレランスに限定された。定義もイントレランスについてのみなされた。「価値判断の面に関して、白か黒かをはっきりさせるという解決手段に頼り、早まった結論に達し、ときには現実性を無視し、そして他者への絶対的で明確な全面的承認または全面的拒絶を求めようとする傾向」(1949)と述べられ、1954年にはつぎのような定義がみられる。「シンメトリー、親密さ、明確さ、規則性に対する過度の偏好、白か黒かの解決、過度に単純化された二分化、あれかこれかという無条件の解決、討論の早すぎる打ち切り、固執、ステレオ・タイプの傾向」

Frenkel-Brunswik の後、曖昧さへのトレランス概念は多くの研究者たちを魅了し、多様な展開がなされたが、その方向は以下の4つに分類できる。

まず第1の方向は、この概念の発生基盤である人種的偏見や権威主義的人格、あるいは独断主義や保守主義などに関連しており、社会態度との関係が濃厚な領域における研究である。(Block & Block, 1951; O'Conner, 1952; Allport, 1953; Eysenck, 1954; Davids, 1955; Zacker, 1973; Chabassol & Thomas, 1975; Eysenck & Wilson, 1978)

第2の方向は、いわゆる曖昧な課題を与えたり、曖昧な状況を設定して、それに対する反応を観察・測定するものである。おもにイントレランスの反応の実例を列挙しようとする方向である。(Martin, 1954; Smock, 1954; Brim & Hoff, 1957; Millon, 1957; Soueif, 1958; Rydell, 1966; Domangue, 1978)

第3の方向は、曖昧さへのトレランス—イントレランスと他の心理学的特性との関係を探究する方向である。たとえば Crandall (1969) は、曖昧さへのイントレランスと概念上かなり隔たったパーソナリティ側面である対人相互間の個人の特性や、友人として選択される個人の特性などとの関連を報告している。(Boggen, 1961; Pawlicki & Alquist, 1973; Shavit, 1975; Foxman, 1976; Keenan, 1978)

最後に第4の方向は、曖昧さへのイントレランスの測定手段に関する研究である。Frenkel-Brunswik 自身は、一連の絵がイヌからネコへと徐々に変化するイヌ—ネコ・テストの使用について述べたが、硬さ (rigidity) 概念との混乱を併発することになった。Levitt, E. E. (1953) や Siegel, S. (1954) はそれぞれパフォーマンス・テストを考案したが、十分普及しなかった。その後は質問紙法の作成や改訂作業が主流を占めている。(Rydell & Rosen, 1966; Budner, 1962; MacDonald, 1970; Norton, 1975; Kirton, 1981)

以上4つの方向はいずれにおいても、曖昧さへのトレランスについて詳しく述べていない。つまり第1の方向は伝統的な権威主義的人格の研究を踏襲し、イントレランスにのみ関心が集中している。第2の方向では、多彩なイントレランスの反応を例示するという傾向が大勢を占める。第3の方向のなかには、トレランスを積極的に扱った例が一部みられる。それは Foxman, P. (1976) によるもので、彼は「曖昧さへのトレランスの高さは、心理学的健康の基礎の高レベルを反映する認知スタイルであるという仮説」をたて、「自己実現が高いと評価された者は、性別に関係なく、曖昧さへのトレランスにおいても有意に高い水準を示した」という結果を報告した。しかしながら、第3の方向も総体的にはトレランスそのものではなく、それが関係しそうな周辺概念との関連を論じ、副次的な変数として扱うにとどまっている。

第4の方向は、曖昧さに対しどの程度イントレラントであるかを測定することが主要な目的であるかのように思われる。しかし質問紙作成の過程では、妥当性検証の問題が不可欠なため、定義についての議論は避けられない。それ以前の研

究をまとめ、それ以後の研究に多大な影響を与えた Budner (1962) は以下の定義を示し、多くの文献に引用されることとなった。「曖昧さへのトレランスとは、曖昧な状況を脅威の源泉として知覚する、すなわち解釈する傾向であり、曖昧さへのトレランスとは、曖昧な状況を望ましいとして知覚する傾向である。」トレランス—イントレランス双方の定義がみられるが、Budner の関心は「曖昧さへのイントレランスをその構成次元に関して定義すること」や「曖昧さへのイントレランスが重要な変数となるような状況のいくつかを例示すること」であった。体系的な研究ではあったが、焦点はイントレランスに限定されていた。このため Budner が定義した曖昧さへのトレランスに対しては、「入念な工夫がなされていない。『望ましい (desirable)』という用語を使ったことは不成功であり、意味づけについてさらに問題を呼び起こすように思われる。」との批判を Kirton (1981) から浴びている。妥当性検証の段階においてもトレランスが考慮されることはほとんどなかったのである。

さて、曖昧さへのトレランスとはいったい何か、イントレランスとの分岐はどうして生じるのかという問題が問われなければならない2つめの理由は、その研究領域が予想を越えるほどに拡大されてきた事実求められる。文献にみられる研究領域と筆者のこれまでの結果を合わせて考えると、曖昧さへのトレランス—インストランスという特性は非常に広範囲な心理学領域において取り扱われており、このことから、それは人間のかなり基本的な心理機能に根ざした包括的な特性であることが確信される。Budner の定義を越えて、曖昧な状況においてだけでなく、より一般的な状況においても機能する特性として、また耐性としての程度差だけでなく、より広い適応機能と関係する特性として曖昧さへのトレランスに注目する視点が必要である。

曖昧な刺激が与えられ、不安が生起し、それを原因とする行動が観察される場合をイントレランスと呼び、そうでない場合をトレランスと呼ぶとするならば、操作的定義としては一応満足なものであろう。しかしこれでは概念が含む内容をあまりにも狭小かつ限定的にしか表現していないように思われる。つまり、S-R 理

論による（曖昧な刺激）→（イントレラントな反応）といった形式の定義は、定義自体としては有用であるかもしれないが、S—O—R 理論の観点から、媒介過程としての有機体Oの機能を明らかにしなければ、トレランスとイントレランスの差違がなぜ生じるかの説明は望むべくもない。多くの曖昧な刺激を分類することや、それらに対する反応例はかなり綿密に調べられ、そうした刺激と反応についての記述は充実している。そこで、曖昧さへのトレランス（イントレランスも含めて）を成り立たせているのは、どのような心理的構造・機能なのか、このことが現時点の疑問として提起されるのである。

つぎに研究領域の広がりをも具体的にあげてみよう。Kirton (1981) が「今までの曖昧さへのトレランスについての文献をふり返ってみると、その概念は過剰なまでに膨張し、混乱したデータが集められて、その基本は支持されないままになっている」と述べているように、研究は拡大というよりむしろ拡散の様相を呈し始めてきている。

Carment, D. W., Alcock, J. E. (1976) は、インドとカナダの大学生を比較し、インド人はカナダ人よりも狭小なカテゴリーを好み、また曖昧さへのトレランスは低いことなどを調べた。

Blake, B. F. ら (1973) は男子大学生に定型的でない製品の目新しさを判断させ、それを好んで買うかどうか報告させた。製品の目新しさは、トレラントな対象では好んで買うこととポジティブに関連し、イントレラントな対象ではネガティブに関連した。

MacDonald, A. P. (1974) は、大学生と教授たちに対して同性愛についての態度を尋ね、同性愛についてより否定的な態度をもつ人々の特性の1つに曖昧さへのイントレランスをあげている。

Galbreath, J., Feinberg, L. B. (1973) は、身体障害者の雇用に関して、曖昧さにイントレラントな対象はより拒否的な態度をもつことを認めている。

Naditch, M. P., Fenwick, S. (1977) は、「LSD フラッシュ・バックと自我機能」と題した論文のなかで、LSD 使用者でフラッシュ・バックの経験のある者

の特徴の1つとして、曖昧さへのトレランスの低いことを検討した。

Harrington, D. M. ら (1978) は、就学前の子どもの曖昧さへのイントレランスを発達的に調べ、後年への影響を確認し、また父母の性格特性との関係についても調査した。

Foote, M. ら (1975) は、クライアントは曖昧さへのトレランスの低いカウンセラーよりも、より高いトレランスのカウンセラーのもとへ再び戻って訪れることが多いことを述べている。セラピストやカウンセラーの資質として曖昧さへのトレランスを扱った研究が近年みられるようになっている。(Tucker & Snyder, 1974; Chasnoff, 1976; Lakovics, 1976; Cook & Kuncze, 1978)

筆者の研究によっても、以下に示す多方面にわたる結果が得られている。

曖昧さへのトレランスの高い個人は……

1. ノンセンス・シラブルに対する連想反応が豊富であり、創造的特性に優れると考えられる。(1978)
2. PAS (Preconscious Activity Scale, Holland & Baird, 1968) により測定される前意識の活動が活発である。(1978)
3. 評定尺度における極端な反応の構えとしての二分化がより少ない。(1979)
4. MAS によって測定される顕在不安が低い。(1980 a)
5. 自己評定における現実的自己と理想的自己との隔りが小さい。(1980 a)
6. 抑圧から派生すると考えられる外罰化傾向が弱い。このことは P-F スタディの E% の低さから推察される。(1980 b)
7. 曖昧な絵刺激に対する自己の反応に高い確信度を示す。明瞭度の高い刺激を好む程度はイントレラントな人よりも弱い。(1981)
8. ロールシャッハ・テストにおける確定的形態反応の比率 (F + %) が高く、認知がより正確である。(1981)
9. 緊張度の高い状況において、クレペリン検査の平均作業量が多く、知的作業効率が優れていると考えられる。(1982)

10. CAS 不安診断検査において、 $Q_3^{(+)}$ 、L、O の因子でより低い不安を示し、全体として不安特性がより小さいとみられる。(1984)
11. 困った場面での自己開示 (Self-Disclosure) は、父母、先生を対象とした場合、イントレラントな人に比べ少なかったが、兄弟姉妹や親友を対象にしたときには顕著な差はなかった。両親や既存の社会規準への傾倒あるいは依存の低さ、実際の困惑体験頻度の少なさが原因として考えられた。(1984)
12. 自己受容 (Self-acceptance) に関して、質問紙による調査ではより高い得点を示し、チェック・リストによる方法では自己批判がより少ないという結果が得られた。(1985)
13. より高い達成動機 (Achievement Motive) との関連が確認された。(1985)

さて、以上述べてきた問題提起に至った 2つの背景を総合的に検討すると、曖昧さへのトレランスそれ自体にアプローチするには、トレランスを今までのようにイントレランスの裏面・対極としてのみ処理せず、そしてかなり多面的に取扱うことが必要条件になると考えられる。こうした経緯から「曖昧さへのトレランスとは、自我強度 (Ego Strength) に関連した良好な自我機能の指標である」という仮説的観点の導入を試みたい。トレランスとイントレランスをまったく異なる特性として分離することなく、1本の連続体上に位置づけ、両極を包括する上位概念に相当すると考えられる自我の機能という観点から、精神力動と適応過程を調べることによって、両者の相違あるいは分岐がいかんして生じているかを考察しようとするものである。

この目的に沿って、心理特性面における差違と、実際の知的課題遂行における特徴の両面からアプローチを試みる。

II 曖昧さへのトレランスに関する3つの実験

Study 1 基本的な人格特性

〔目的〕曖昧さへのトレランス—イントレランスの特性論的な差違を調べ、その特性に基づいて両者の自我機能の特徴を推測し、それが適応にとっていかに貢献し、いかに妨害となるかを検討する。曖昧さへのトレランスは1つの人格特性とみなされており、それをいわば要素に分解して考えるという試みは、是非はともかくなされてこなかった。トレランスと相関の強い諸特性をトレランスの構成要素と仮定し、それら特性の組み合わせや相互作用によってトレランスの機能を考察する。またトレランスの高い人は、本来どのような傾向を潜在的にもつのか、つまり曖昧な刺激がない状況であってもトレラントな人とイントレラントな人にはいわば内的準備状態に特性上のちがいが見出されるはずであり、この点にも興味もたれる。

〔方法〕曖昧さへのトレランスの尺度としては、Norton, R. W. (1975) による質問紙 MAT-50 (Measurement of Ambiguity Tolerance-50) を邦訳したスケール (AT スケールとする) を用いた。この AT スケールの再検査信頼性は、6カ月の期間をおいて、 $r = .734$, $p < .01$, $N = 51$ という数値が筆者により得られている。項目数が61の5ポイント・スケールである。回答が肯定、否定のいずれかに80%以上集中する項目は14であったが、単一の選択肢へのそのような集中は認められなかった。妥当性の検証は終結のない難問とされるが、さきに述べた筆者の13の結果はすべて AT スケールを基礎に得られており、理論から導かれるトレランス概念との一致が確認されている。

人格特性の測定には Y-G 性格検査が用いられた。

対象は、大阪市内の保育専門学校の1, 2年生女子99名 (対象Aとする) および結果の一般性を確認する目的で、関西学院大学で教育心理学を志望する2年生47名 (M: 18名, F: 29名) (対象Bとする) を加えた。対象A・Bの両群それぞれ

れに AT スケールと Y-G 検査が集団で施行された。

〔結果と考察〕 Table 1 に曖昧さへのトレランス得点と、Y-G 検査の12特性、6 因子群との相関係数を示す。対象Aと対象Bとの曖昧さへのトレランス得点にはかなりの隔りがみられた。対象Aの平均と標準偏差が155.3, 22.00であるのに対し、対象Bでは167.1, 19.08である。にもかかわらず Y-G 検査との相関はたいへんよく近似した数値を示し、有意差のみられた特性および因子群はほとんど一致した。

Fig.1 には、対象Aの AT スケール得点の上位30%、下位30%に属する学生の

Table 1. 曖昧さへのトレランス得点と Y-G12 特性、6 因子群との相関

	対 象 A	対 象 B
D 抑 う つ 性	-.164	-.108
C 気 分 の 変 化	-.223*	-.328*
I 劣 等 感	-.182†	-.474**
N 神 経 質	-.428**	-.353*
O 主 観 的	-.218*	-.030
Co 非 協 調 的	-.214*	-.477**
Ag 攻 撃 的	-.473**	-.403**
G 活 動 的	-.206*	-.348*
R の ん き	-.249*	-.178
T 思 考 的 外 向	-.099	-.159
A 支 配 性	-.002	-.110
S 社 会 的 外 向	-.131	-.182
情 緒 不 安 定	-.221*	-.374**
社 会 的 不 適 応	-.368**	-.334*
活 動 性	-.336**	-.382**
衝 動 性	-.281**	-.323*
非 内 省 性	-.096	.018
主 導 性	-.068	-.145

† p < .10 * p < .05 ** p < .01

Fig. 1 対象Aにおける曖昧さへのトレランス得点の上位30% (HAT) と下位30% (LAT) に含まれる学生の Y-G プロフィールの比較

Y-G 特性の平均値をプロフィール表示した。曖昧さへのトレランスの高い群 (HAT: High Ambiguity Tolerance) は、トレランスの低い群 (LAT: Low Ambiguity Tolerance) と比較して、左側部分に偏ったプロフィールがみられ、両者のちがいが鮮明に描出されている。

まず特性の相違から検討を始める。示された図表より、HAT は LAT と比べて、劣等感 I が低く、協調性 Co の高いことが読みとられる。I, Co の項目内容を検討すると、曖昧さにトレラントな人とは、自己に自信と確信をもち、決断力があり、さらに他者や社会への不満や不信が少なく、対人関係においてしっかりした信頼感をもつと解釈される。このことは、「自己や他者・社会への肯定的な評価感情」として整理できよう。一方曖昧さにイントレラントな人は、自己の判断や能力を頼りなく感じ、自己評価は低く、他者に対しては懐疑的なようである。これは「自己や他者・社会への否定的な評価感情」とまとめられる。曖昧さへのトレランスは、人種的偏見の研究に端を発していることから、低い自己評価とその補償や他者への懐疑傾向などが偏見に関連するであろうことが十分予想される。

つぎに回帰性傾向Cと神経質Nについて、HATはLATと比べ、それぞれの特性がより低いという結果が示されている。項目を具体的にみると、Cでは「気分がしばしば動揺する」「時々気が散って考えがまとまらない」「すぐ不気厭になる」などであり、Nでは「小さいことを気に病む」「人から見られているようで不安である」「すぐ感情を傷つけられやすい」などである。これらのことから考えて、曖昧さへのトレランスの高い人は、自己の内面的な気分変動によって、あるいは環境からの刺激によって心理的平衡が乱されることが比較的少なく、情緒の安定度が高いといえる。ところがLATでは、情緒の安定度は精神内界それ自体についても、また種々の刺激に対しても著しい変動をきたしやすい。これらのことからHATを「情緒の安定性維持」、LATを「情緒の不安定動揺」として特徴づけることができる。

一般活動性Gをみると、HATはLATよりも不活発であるという結果が示されている。ただし、活動の量とともに質的側面も考慮して、攻撃的AgとのんきさRの2つの特性もあわせて検討すべきであろう。つまりトレラントな人は一般活動性が低いと同時に、攻撃的特性やのんきさも低い点が注目される。Agの質問項目には、「いつも何かしていないと気がすまない」「衝動的である」「気が短い」「失礼なことをされるとだまっていない」などがみられ、衝動性の統制欠如といった意味が濃厚に含まれる。特性Rはのんきさの程度をあらわすとされているが、実際の項目には、「計画をたてるよりも実行がしたい」「じっとおとなしくしているのが苦手である」「いつも何か刺激を求める」「よく考えずに行動してしまうことが多い」「早合点の傾向がある」などがあり、衝動を即座に行動に表出する傾向を示す特性でもあることがわかる。このように特性の内容を吟味したうえで結果の解釈を試みる。そうすると曖昧さにトレラントな人とは、周囲の状況と調和を保つように衝動が統制あるいは抑制されるため、表面的な行動量はイントレラントな人よりも相対的に少なくなり、結果として不活発とみなされるわけである。しかし攻撃的Ag、一般活動性G、のんきさRの絶対的な位置づけはプロフィールの中央段階に入っており、かつ思考的外向T、支配性A、社会的外向S

についても段階4に属していることから、曖昧さにトレラントな人がけっして引っ込み思案や消極的であるとはいえず、反対にイントレラントな人の活発な行動の内容が、前後関係の考慮が不十分であり、衝動的、短絡的な性質をもつと考えたほうが適切であろう。以上のようなことから、曖昧さへのトレランスとイントレランスは相対的に、「衝動の熟慮的統制化——衝動の短絡的行動化」として特徴づけられる。

藤木(1982)は、本研究で使用されたものと同じATスケールを用いるとともに、複数の点を結んで作られた無意味な多角形が何に見えるかという反応を大学生を対象として求めた。そして結果の1つにLATはHATより動物運動反応FMが有意に多いことを報告している。また人間運動反応Mには有意差はみられなかったとしている。FMの基本的な解釈はつぎのようである。「FMは、Mに対して、より未熟で、より無意識的で、ときには、その人の基本的衝動のより受容しがたい部分を示している。それは、これらの衝動がどの程度受容されているかを示すことはもちろん、その衝動の強さをも反映している。これらは、即時的な満足を要求する衝動であり、したがって統制を必要とするものである」(Klopfer, B., Davidson, H. H. 1962)このことから、イントレラントな人はより衝動的であり、それを行動に表出させやすい傾向をもつことが再確認される。

因子群についての考察は、先に述べた特性の考察と特に異なる点はない。すなわち曖昧さにトレラントな人は、イントレラントな人と比較して、情緒はより安定的であり、社会的適応はより良好である。そして活動性は低いが、衝動的行動の抑制が原因と考えられる。一方イントレラントな人には、情緒不安定さと不適応、衝動的行動傾向といった特徴が認められる。

曖昧さへのトレランス—イントレランスは、曖昧な刺激が与えられたときに、はじめて両者の差異が顕在化してみられるとするBudnerの見解は一応理解できる。しかしこのStudy1の結果から、曖昧な刺激の有無にかかわらず、特性上の違いが潜在的に存在していたことが認められたわけで、これは今後の研究に利用され得る情報を提供するはずである。

Study 2 知的・精神作業的課題の遂行

〔目的〕この Study 2 においては、さまざまな知的パフォーマンス課題を与え、その成績を分析することにより、曖昧さへのトレランスの高い人の 実際的な知的能力や精神作業の特徴を考察する。

〔方法〕多様な内容の 知的課題を含む検査として、労働者編の一般職業適性検査の紙筆検査が採用された。これは11種の下位検査から構成され、すべて一定の時間制限が設けられている。曖昧さへのトレランスの測定には Study 1のデータを利用した。対象は Study 1 と同じく保育専門学校生女子97名であり、集団施行した。

〔結果と考察〕Fig.2 には曖昧さへのトレランス得点と職業適性検査得点との関係について、 χ^2 検定結果が示されている。図中の上向き図形 (Δ) は、トレラント群の職業適性検査得点がイントレラント群よりも高いことを示し、下向き図形 (∇) は、イントレラント群の得点のほうが高いことを表示する。この三角図形の個数は有意水準の程度を表わす。知能Gから共応Kまでは、下位検査を一定の比率で加算したもので、適性能と呼ばれる。AT 2ケールの8つのサブ・カテゴリーはほとんどが有意な正の関連をもち、すくなくとも負の関連をもたないことは確認されている。

まず適性能の共応Kにおいて、曖昧さにトレラントな人は、イントレラントな人に比べて、5%水準で得点(作業量)が少ないという結果が目される。具体的な共応Kの検査内容は、縦線記入C(H字形図形の両側の線に触れないようにして、できるだけ多くのHの横棒を切るように短い縦の線をひく)、打点速度F(連続した長方形の枠の中に、鉛筆で点を3つずつできるだけ速く打つ)、記号記入J(正方形の枠の中にllのような記号をできるだけ速く書き入れる)の3検査である。これらC、F、Jの3検査は、他の下位検査とはいくぶん性質が異なっている。つまり課題遂行には思考過程の介入がほとんどないと考えられ、きわめて単純な事務的連続操作のみで解決が得られ、選択に迷う余地のないことが特徴である。

Fig. 2 曖昧さへのトレランスと職業適性検査の得点の関連の程度と方向

こうした課題の遂行では、曖昧さにトレラントな人のほうが作業量は有意に少ないのである。この原因には、課題に対する好み、意欲、手腕の運動能力など多くの要因が関係すると思われるが、Study 1 の結果を参考にして、衝動性の行動化の差に帰因させることが妥当であろう。すなわち鉛筆でどンドン点を打ち続けるという明瞭かつ単純な、そして一部分であっても身体的運動を伴う課題においては、衝動性ともいえるような心的エネルギーを行動に移すことが大きく関係すると考えられる。そのため衝動性が低くて抑制されたトレラントな人の作業量は相対的に少なくなったと考えられるのである。

知能G、言語V、数理Nといった、いわゆる知的能力が強く関連する課題においては、トレランスーイントレランス間の顕著な差は認められなかった。ただし算数応用Hや語意I（1組4語からできている単語の語意を考え、同じ意味または反対の意味の2語を選び出す）については、トレラントな人のほうがやや高得点を示す傾向がみられた。問題の構造が複雑で、解答までに時間を要する課題では、トレラントな人のようがいくぶん有利であることがうかがえる。

解答に至るまでの複雑さの相対的な程度によって、下位検査をA～K（C、F、

Jを除く)の複雑思考課題と、C、F、Jの単純動作課題の2種に分類を試み、各々を高低2分した。そして4つのカテゴリーごとのATスケール得点を比較したのがTable 2である。分散分析の結果は、 $F=4.301$, (3,94) $P<.01$ となった。さらにカテゴリー間の差を調べたところ、複雑思考課題の得点が高く、かつ単純動作課題の得点が低いカテゴリーに属する人は、他の3つのカテゴリーに属する人と比較して、5%水準で有意に高いトレランスを示した。つまり熟慮や高知能を必要とする課題に優れ、しかも単調な作業課題に劣る人々は、より曖昧さにトレラントであると考えてもよさそうである。と同時にすべての課題について万能な人が必ずしもトレラントであるとはいえないことも示唆される。

Table 2. 職業適性検査の2種類の課題の高低と曖昧さへのトレランスの関係

		単純動作課題	
		H.	L.
複雑 思考 課題	H	n = 28	n = 25
		150.2	166.0
	L	16.02	20.91
		n = 20	n = 24
	148.9	150.9	
	15.27	22.44	

空間S、形態Pについては、イントレラントな人の得点がわずかであるが高い傾向がみられた。形態Pでは正答数とともに誤答数も多いので、イントレラントな人がこの適性能に優れると即断することはできない。空間Sの結果については、現在のところ十分な解釈を行なう基礎はないが、今後知能や思考過程との関係をより進めて調べることが必要であろう。

ATスケールの8つのサブ・スケールと職業適性検査との関連に注目すると、まったく奇妙な結果に気づく。つまり Interpersonal Communication と Social の2つのサブ・スケールでは、高トレランスが多くの下位検査の低得点と関連

し、逆に Habit では、高トレランスが高得点と関連している。AT スケールのサブ・スケールの整備を徹底することも必要である。しかし個人のもつ曖昧さへのトレランスは、さまざまな領域でのトレランスから構成され、ある領域におけるトレランスは他の領域におけるトレランスと異なった機能を発揮するのかもしれないという観点から検討を進めることができれば、新たな展望が開けるのではないか。対人・社会的な曖昧さを嫌う傾向が、たとえ集団施行であっても、分離された個人として課題へ取り組むことの好みを促進させたとも考えられる。しかしこの問題は今後説明されるべき疑問として残される。

つぎに誤答数については、HAT は LAT よりも有意に少なかった。 $(\chi^2=3.925, df=1, p<.05)$ Fig.2 の誤答数合計の算出は、下位検査ごとに誤答数が異なるため、下位検査それぞれの誤答数を高低2分し、誤答数が多いとされた下位検査の数を個人ごとに合計した。ただしC, F, Jについては手続上、誤答の判定が困難なため除外した。したがってここで述べる誤答数とは、前述の複雑思考課題についてのみである。

Fig.2 に認められるとおり、すべて下向き (▼) の図形となっており、高トレランスが誤答数の少ないことと関連することは明白である。誤答が生じる原因には、能力的な要因と心理特性的な要因とが考えられる。しかし正答数全体には差がみられなかった $(\chi^2=0.151, df=1, n. s.)$ ことから、能力的な要因は棄却され、心理特性的な要因が重視される。曖昧さにイントレラントな人に誤答が多発する理由はつぎのように理解できる。イントレラントな人は、解答が導き出されるまでの未決定の状態に十分に耐えることができず、実際行動としての解答記入を早く行なおうと急ぎすぎるあまり、吟味不十分のまま記入してしまうのである。これと逆の意味でトレラントな人の回答態度はより熟慮的といえる。

誤数の分布の概略が Table 3 にみられる。LAT の誤数は、HAT の誤数と比べ、両極が多い。任意的な分割ではあるが、中央帯と両極との誤数を両群で比較すると、LAT のほうが誤数はより両極に集中して分布することが確認された。

$(\chi^2=4.376, df=1, p<.05)$

Table 3. HAT, LAT が誤数3段階に占めるパーセント

		HAT	LAT
誤 数	少 (0~1)	13 (6)	21 (11)
	中 (2~4)	58 (26)	37 (19)
	多 (5~)	29 (13)	42 (22)

()内は実数

このことは、イントラントな人すべてが衝動的判断によって多くの誤答をしているというのではなく、誤った答を生じることへの過剰な不安、つまり正確さに対する強迫性をもつ人も一部に含まれるかもしれないことを示唆する。

Study 3 神経症傾向と身体的自覚症状

〔目的〕良好な自我機能の指標の1つとして、神経症傾向の少ないことを取り上げ、曖昧さへのトレランスとの関連を検証する。さらにその延長として、神経症傾向と関連の深い身体的自覚症状についても調べる。

〔方法〕モーズレイ性格検査 MPI を前述の保育専門学校生 44名に集団で実施し、外向性の程度を示すE尺度点、神経症傾向を示すN尺度点、回答の信憑性を調べるL尺度点を算出した。

さらに CMI 健康調査表(女性用)を95名に施行した。この質問紙には身体的自覚症として12のサブ・カテゴリーと、精神的自覚症として6つのサブ・カテゴリーがあり、両者の得点を直交座標にとって神経症傾向をI~IVの段階で判別することもできる。

曖昧さへのトレランスのデータは、さきの AT スケールの結果を利用した。

〔結果と考察〕まず MPI において、曖昧さへのトレランスは神経症傾向との有意な負の相関 ($r = -.336, p < .05$) を示した。一方、外向-内向性次元との相関は小さく、有意差はみられなかった。($r = .093, n. s.$) これら結果は、Study 1 での Y-G 検査における神経質Nや社会的外向Sに関する結果と一致している。なおL尺度得点との相関に有意差は認められなかった。($r = .011, n. s.$)

ここで扱われる神経症傾向は、自律神経系の活動と密接に関連する生物学的基礎をもつとされる。「アイゼンクの仮定によると、神経症患者、さらに一般的にいて神経症傾向が強い人は、自律神経系が不安定で、興奮しやすい。自律神経系の不安定性と興奮性の個人差によって、神経症的傾向の個人差が生ずるのである。(1967, i)」(杉山善朗, 1969)と述べられており、さまざまな刺激に対して非常に強い情緒的反応を示すと考えられている。このことから、イントレラントな人は、自らの情緒的あるいは生理的レベルでの安定を維持するためには、直面する刺激量・範囲の制限が必要となるはずであり、受容可能な刺激のレンジはより狭小にならざるをえないと推測される。一方トレラントな人は、自律神経系の安定度がより高く、情緒的に過剰な反応を生じにくいいため、より広範なレンジの刺激に対して不安を伴わない一般的な刺激として受容可能と思われる。この結果は、自律神経系の安定—不安定として、トレランスとイントレランス間の差違を集約して表現すると考えられる。

つぎに曖昧さへのトレランスと身体的自覚症の訴えの考察に移るが、杉山(1969)の以下の見解が参考となる。「自律神経系は全体として一様に働かないで、自律神経系のある部分は、他の部分よりもはるかに強く反応するのである。しかも人によって特に強い反応を示す部分が違うのである。この特殊性は遺伝する。自律神経系の働きが強い部分は、情緒的障害に出あうと、表面に現われてくる。ある心理的ストレス下におかれると、頭痛を示す人もいれば、肩のこる人もいるし、さらにある人が胃の痛みを訴えることは、このような自律神経系の個人差の現われであると考えられる。」

対象は心身ともに健全とみなされる集団であったため、CMI健康調査表の各サブ・カテゴリーの得点は全体に低得点域に偏って集中した。そこで χ^2 検定による処理の結果、Table 4に示されるように、HATは身体的自覚症の合計得点がLATと比ベ有意に低いことが認められた。 $(\chi^2=5.948, df=1, p<.05)$ 精神的自覚症の合計得点については、HATはLATより低い傾向を示した。 $(\chi^2=2.962, df=1, p<.10)$ CMI全体の身体・精神自覚症の総得点においても当然な

Table 4. CMI サブ・カテゴリーと曖昧さへのトレランスとの関係 (χ^2 値)

身体的自覚症計	5.948*
精神的自覚症計	2.962†
身体精神自覚症計	8.902**
A 目 と 耳	1.601
B 呼 吸 器 系	2.962†
C 心 臓 脈 管 系	0.331
D 消 化 器 系	2.293
E 筋 肉 骨 格 系	4.288*
F 皮 膚	0.198
G 神 経 系	0.000
H 泌 尿 生 殖 器 系	0.174
I 疲 勞 度	0.998
J 疾 病 頻 度	0.127
K 既 往 症 慣	0.497
L 習 慣	0.034
・ C I J 計	0.766
M 不 適 応	3.403†
N 抑 う つ	1.162
O 不 安	0.203
P 過 敏	0.766
Q 怒 り	4.572*
R 緊 張	1.893

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

がら、HAT が LAT より自覚症頻度の低いことを示す十分な有意差が認められた。($\chi^2=8.902$, $df=1$, $p < .01$)

サブ・カテゴリーについては、筋肉骨格系E、怒りQにおいて5%水準で、また呼吸器系B、不適応Mにおいては10%水準で、それぞれ HAT の自覚症状がより少ないことが認められた。さらに泌尿生殖器系を除く他のすべての CMI サブ・カテゴリーにおいて、HAT は LAT より自覚症状が下回っており、これら結果は、曖昧さにトレラントな人は自律神経系がより安定していて、そのため身体的自覚症状を訴えることがより少ないという仮定を強力に支持している。呼吸器系Bや筋肉骨格系Eとトレランスとの関係は、自律神経系の反応の特殊性を原因

として考える以外に満足な説明はできそうにない。

精神的自覚症の不適応Mには、「見知らぬ人や場所がとても気になりますか」「そばに知った人がいないと、おどおどしますか」など、曖昧な場面でのイントレランスの特徴を示す質問項目が含まれる。怒りQには、「何かしようと思ったらいてもたってもおれなくなりますか」「自分の思うようにならないと、すぐかあつとなって怒りますか」など、Study 1 で結論された衝動の短絡的行動化に近似した意味内容の項目が多く、それぞれ有意な関連に寄与しているはずである。

なお不安Oの χ^2 値は0.203とたいそう小さく、以前にMAS, CASを使用して得られた結果とは異なっている。この原因は質問紙作成過程の項目選択プロセスや不安概念が、MASの場合とCMIの場合とでは著しく異なっているためであり、CMIにおける不安Oというカテゴリー名は厳密には適切でないと思われる。

ATスケールのサブ・スケールについて調べると、Interpersonal Communicationにおけるトレランスと、少ない自覚症状との関連がとりわけ強く、同様の結果がHabitやJob-Relatedにも認められた。実生活により密着した状況でのトレランス―イントレランスが、自覚症の程度に大きく影響しているようである。現代人の日常生活はさまざまなレベル、カテゴリーの曖昧さに取巻かれ、どのような形にせよ、それらとの対応を余儀なくされている。曖昧さにトレラントな人は、そうした曖昧な状況と適応的に共存できる安定度の高い自律神経系をもっているため、イントレラントな人に比べて、曖昧さが心理的ストレスの原因となることは軽微であり、それが具体的には身体・精神的自覚症状の少ないこととして反映されたと解釈される。

補足的にCMIの神経症判別図領域I～IVに分類されるHAT, LAT両群の人数が調べられた。領域I（5%水準の危険率で正常と判定しうる領域）とII～IV（一応正常と判定してさしつかえない領域～5%水準の危険率で神経症と判定しうる領域）とに分割して検定した結果、HATはLATよりも神経症傾向の少ないことが10%水準で示された。（ $\chi^2=3.261$, $df=1$, $p < .10$ ）この実験では実際の神経症患者を対象としていないので、神経症との関係を直接的に論じることは

できないが、ノーマルな同質的集団のなかでさえ、トレランスの程度が正常あるいは神経症的と判定される段階に関係することが見出されたのである。

Ⅲ 総合的考察

Study 1 ～Study 3 の実験で得られた結果と、それに基づいた考察の概略を、

Table 5. 曖昧さへのトレランス-イントレランスに関する3つの実験の結果と考察の一覧

	Ambiguity Tolerance	Intolerance
Study 1		
劣等感 I	低	高
協調性 Co	高	低
	自己確信・充実感	自己不信・不全感
	他者・社会への肯定的 評価感情	他者・社会への否定的 評価感情
回帰性 C	低	高
神経質 N	低	高
	情緒の安定性維持	情緒の不安定動揺
一般活動性 G	低	高
攻撃的 Ag	低	高
のんかさ R	低	高
	衝動の熟慮的統制化	衝動の短絡的行動化
Study 2		
単純な動作的課題	不良	良好
複雑な思考的課題	やや良好	やや不良
誤答数	少	多
	熟慮的处理様式	衝動的处理様式
Study 3		
神経症傾向	小	大
	自律神経系安定	自律神経系不安定
	受容可能な刺激レンジ大	刺激レンジ小
身体・精神的自覚症状の訴え	少	多
	心理的ストレス小	心理的ストレス大

曖昧さへのトレランス―イントレランスの対にして Table 5 にまとめた。

さて自我機能に関する見解は、Freud, S. 以来、多くのおもに自我心理学の立場に立つ研究者によって列挙されてきたが、完全な一致をみていない。自我概念の変遷や規定の問題を論じることは、目的でないので、ここでは古市 (1981) によって紹介されている Bellak, L., Sheehy, M. (1976) による自我機能の構成要因を提示するにとどめておく。これは自我の強さを測定する尺度が改良されたもので、12の機能とそれぞれの構成要因を示している。12の機能は、I. 現実検討、II. 判断、III. 現実感覚、IV. 衝動統制、V. 対象関係、VI. 思考過程、VII. 適応的退行、VIII. 防衛機能、IX 刺激障壁、X. 自律的機能、XI. 総合―統合機能、XII. 支配―有能性である。

今回得られた結果との対応を考えると、「衝動の熟慮的統制化」や「熟慮的処理様式」は、リビドー的なエネルギーのコントロールに関するもので、IV. 衝動統制 (a. 衝動表出の直接性、b. 遅延機能の効率性) にきわめて近いと考えられる。「自己確信・充実感」は自己概念に関係しており、III (c. 自己同一性と自尊感情) や XII (b. 実際の遂行における成功についての期待度によって測定される有能感) などとの密接な対応がみられる。さらに「受容可能な刺激レンジ大」「情緒の安定性維持」「自律神経系安定」「心理的ストレス小」については、刺激を受容する側の安定性に関連しており、IX 刺激障壁 (a. 刺激に対する域、b. 過度に強い刺激の入力の処理の効率性) との対応が認められる。本研究は12すべての自我機能を網羅できるような包括的なデザインではないが、部分的にせよ、曖昧さへのトレランスの基礎となる種々の心理学的特質が、自我の良好な機能に関連させられたわけである。つまり、精神内界の動揺や衝動を統制し、それらに影響されず外界環境を受容し、あるいは熟慮的に処理し、こうした自律的な機能を有する自己に対してポジティブな自己概念をもつというところに、曖昧さへのトレランス成立の基盤があると考えられる。

同様の方法によって筆者の以前の研究結果を検討すると、「ロールジャッパ・テストでの高いF+%」は、I (b. 外的事象の知覚の正確さ) に該当するである

う。「前意識活動の活発さ」は、VII (a. 認知的鋭敏性を退行的にゆるめる能力)と関連する。

自我という概念は、刺激と反応とを媒介する媒介過程としても把握できる。すなわち、同一刺激から同一反応が生じるとは限らず、個人によって、状況によって、反応は多様に変化する。それでは曖昧さにトレラントな人とイントレラントな人は、曖昧な刺激事態に面したときに、いかなる過程でそれに対処し、結果としての反応にちがいが生じてくるのであろうか。

まず、曖昧さにトレラントな人というのは、さまざまな刺激に対する情緒安定度がより高く、劣等感は小さく、他者・社会について肯定的な評価感情をもち、知的課題の解決はより正確であり、身体的な自覚症状は少ない。つまり、曖昧な外的環境の有無にかかわらず、内的な心理状態は、情緒の安定度、一般能力、社会との関係、健康感など、総合的な自己に対する信頼に裏づけられており、自己は確実で安定したものであるという感覚が中核にあると考えてよい。そのため曖昧な刺激事態に直面した場合にも、自己内部の安定感覚は影響を受けることは少なく、曖昧さに対して自己の防衛にばかりエネルギーを費やす必要は生じない。一般の状況下とほとんど変わりのない心理状態を保持することができ、通常の様式に近い反応が可能となる。不安や強い衝動などによって内面の平衡に動揺が生じた場合にも、それらを短絡的に解消しようという動機に基づく行動の表出は抑制され、現実吟味を損なうまでに至らない。以上の観点からすれば、曖昧さへのトレランスとは、曖昧さを好むとか、曖昧さを捜し出すとかの意味はなく、曖昧さに対するニュートラルな心理機能の保持を意味することになる。

一方、曖昧さにイントレラントな人は、一般的にさまざまな刺激に対して情緒はたやすく動揺を起し、能力についても社会的関係についても自信が欠如し、身体的な健康感も低い。すなわち、自己評価が低く、漠然とした自己不安定感覚が基礎にある。したがって安定感覚を保つためには、環境の明確な規準や絶対的な枠組に自己を依拠させることが求められる。曖昧な刺激事態が与えられた場合には、不確実で不安定な自己の感覚を防衛するために種々の策略が用いられる。

曖昧な刺激を解消するために、即座に既知のものに結びつけようとしたり、極端な二分化を用いたりする。頼りない自尊感情を回復させるためには、他者の価値を相対的に下落させることを企て、自己が感じている劣等性や不全感の投射を多用し、偏見や人種の差別の基礎を形成する。以上のように考えてくると、曖昧さへのイントレランスとは、曖昧な刺激に対する反応というより、むしろ不確実、不安定で曖昧である自分自身に対する反応と解釈したほうが適切かもしれない。イントレラントな人では、曖昧さによって不安・焦燥が生じると、それを解消することが最優先され、現実吟味は弱められ、短絡的な思考や衝動的な行動が支配的になり、適応の失敗を招くことになりかねない。

先に述べたように、曖昧な刺激がなければ、トレランス—イントレランスの差はそれほど表面化せず、行動レベルでの差は顕著でないとする見解は妥当である。しかし表面行動に差がみられないとき、つまり曖昧さがいないときにも内面の自我機能レベルでの差は明らかに存在し、そこから曖昧さへのトレランス—イントレランスの分岐が生じるのである。曖昧さへのトレランスは自律的な自我機能として、イントレランスは不適応な防衛反応として理解されるのである。

要 約

曖昧さへのトレランス概念は、定義の不備を指摘されながらも、研究分野はますます拡大されてきている。そこで、曖昧さへのトレランス—イントレランスの特徴をより根底的な自我機能の側面から説明することを試み、両者の成立基盤のちがいの解明を目的とした。

MAT—50 邦訳版、Y-G 性格検査、労働省編一般職業適性検査、MPI、CMI が保育専門学校女子を対象として集団で施行された。

これらの結果には相互に関連性がみられ、つぎのように整理された。曖昧さにトレラントな人は、イントレラントな人と比較して、自己・他者・社会への肯定的評価感情が高く、衝動の抑制的統制や熟慮的处理様式に優れ、自律神経系の安定がみられ、身体的自覚症状の訴えが少ないことなどによって特徴づけられる。

これらのことに基づいて、トレラントな人は、確実に安定した自己概念を基盤とした自律的な自我機能をもつと解釈された。

一方イントレラントな人は、不確実に不安定な自己概念を基礎とする防衛的な自我機能をもつと結論された。

曖昧さへのトレランス—イントレランス両者の基本的な差違は、曖昧な刺激の有無やそれへの反応以前に、自我機能レベルにおいて存在することが検証され、このことが分岐の源泉となることが確認された。

引用・参考文献

- Allport, G. W. 1961. The nature of prejudice. 原谷達夫, 野村昭. 偏見の心理. 倍風館. 1969.
- Blake B. F., Perloff, R., Zenhausern. R. & Heslin, R. 1973. The effect of intolerance of ambiguity upon product perceptions. *Journal of Applied Psychology*, 58, 239-243.
- Block, J. & Block, J. 1951. An investigation of the relationship between intolerance of ambiguity and ethnocentrism. *Journal of Personality*, 19, 303-319.
- Bogen, I. 1961. Some operational definitions of intolerance of ambiguity and their relationship to adaptation and anxiety. *Dissertation Abstracts*, 22. 10. 3738.
- Brim, O. G. Jr. & Hoff, D. B. 1957. Individual and situational differences in desire for certainty. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 225-229.
- Budner, S. 1962. Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality* 30 29-50.
- Carment, D. W. & Alcock, J. E. 1976. Some psychometric correlates of behaviour in India and Canada. *International Journal of Psychology*, 11, 57-64.
- Chabassol, D. J. & Thomas, D. 1975. Need for structure tolerance of ambiguity and dogmatism in adolescents. *Psychological Reports*, 37. 507-510.
- Chasoff, S. S. 1976. The effects of modeling and ambiguity tolerance on interview behavior. *Counselor Education & Supervision*, 16. 46-51.
- Cook, D. W. & Kunce, J. T. 1978. Paramodeling effects in counselor training. *Journal of Employment Counseling*, 15, 62-66.
- Crandall, J. E. 1969. Self-perception and interpersonal attraction as related to tolerance-intolerance of ambiguity. *Journal of Personality*, 127-140.

- Dauids, A. 1955. Some personlity and intellectual correlates of intolerance of ambiguity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 415-420.
- Domangue, B. B. 1978. Decoding effects of cognitive complexity, tolerance of ambiguity, and verbal-nonverbal inconsistency, *Journal of Personality* 519-535.
- Eysenck, H. J. 1954. *The Psychology of Politics*. New York, Praeger.
- Eysenck, H. J. & Wilson, G. D. 1978, *The Psychological Basis of Ideology*. 塩見邦雄, 社会態度, ナカニシヤ出版, 1981.
- Foote, M., Davis, W. L. & Marks, S. E. 1975. Tolerance of ambiguity ; A variable in client and counselor pairing. *Canadian Counselor*, 9, 63-68.
- Foxman, P. 1976. Tolerance for ambiguity and self-actualization. *Journal of Personality Assessment*, 40, 1. 67-1. 67-72.
- Frenkel-Brunswik, E. 1949. Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable, *Journal of Personality*, 18. 108-143.
- Frenkel-Brunswik, E. 1954. Further explorations by a contributor to "The Authoritarian Personality." In R. Christie & M. Jahoda (Eds.), *Studies in the scope and method of "The Authoritarian Personality."* New York. Free Press.
- 藤木伸顕 1982. 無意味図形の認知にみられるパーソナリティの投影性 日本応用心理学会第49回大会発表論文集, 62.
- 古市裕一 1981, 自我機能の測定と評価 中西信男, 鎌幹八郎(編) 心理学10自我・自己。有斐閣, 1981.
- Galbreath, J. & Feinberg, L. B. 1973. Ambiguity and attitudes toward employment of the disabled : A multidimensional study. *Rehabilitation Psychology*, 20. 165-174.
- Goldstein, K. M. & Blackman, S. 1978 *Cognitive Style*. 島津一夫, 水口禮治, 認知スタイル, 誠信書房, 1982.
- Harrington, D. M., Block, J. H. & Block, J. 1978. Intolerance of ambiguity in preschool children: Psychometric considerations, behavioral manifestations, and parental correlates. 1978. *Developmental Psychology*, 14. 242-256.
- Holland, J. L. & Baird, L. L. 1968. The preconious activity scale : The development and validation of an originality measure. *Journal of Creative Behavior*. 2, 3, 217-225.
- Keenan, A. 1978. Selection interview performance and intolerance of ambiguity. *Psychological Reports*, 42, 353-354.
- Kirton, M. J. 1981, A reanalysis of two scales of tolerance of ambiguity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 4, 407-414.

- Klopfer, B. & Davidson, H. H. 1962. The Rorschach Technique. An introductory manual. 河合隼雄, ロールシャッハ・テクニク入門, ダイヤモンド社, 1974.
- Lakovics, M. 1976. Some problems in learning to do "good psychotherapy." *American Journal of Psychiatry*, 133, 834-837.
- Levitt, E. E. 1953. Studies in intolerance of ambiguity: I. The decision-location test with grade school children. *Child Development*, 24, 3 and 4, 263-268.
- Mac Donald, A. P. 1970. Revised scale for ambiguity tolerance: Reliability and validity. *Psychological Reports*, 27, 791-798.
- Mac Donald, A. P. 1974. The importance of sex-role to gay liberation. *Homosexual Counseling Journal*, 1, 169-180.
- Martin, B. 1954. Intolerance of ambiguity in interpersonal and perceptual behavior. *Journal of Personality*. 22, 499-503.
- Millon, T. 1957. Authoritarianism, intolerance of ambiguity, and rigidity under ego and task-involving conditions. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 55, 29-33.
- Naditch, M. P. & Fenwick, S. 1977. LSD flashbacks and ego functioning. *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 352-359.
- Norton, R. W. 1975. Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*. 39, 6, 607-619.
- O'Conner, P. 1952. Ethnocentrism, "Intolerance of ambiguity," and abstract reasoning ability. *Journal of Abnormal and social Psychology*, 47, 526-530.
- Pawlicki, R. E. & Alquist, C. 1973. Authoritarianism, locus of control, and tolerance of ambiguity as reflected in membership and non membership in a womens liberation group. *Psychological Reports*, 32, 1331-1337.
- Rydell, S. T. & Rosen, E. 1966. Measurement and some correlates of need-cognition. *Psychological Reports*, 19, 139-165.
- Rydell, S. T. 1966. Tolerance of ambiguity and semantic differential ratings. *Psychological Reports*, 1303-1312.
- Shavit, H. 1975. Personality adjustment as a function of interaction between locus of evaluation and tolerance of ambiguity. *Psychological Reports*, 37, 1204-1206.
- Slegel, S. 1954. Certain determinants and correlates of authoritarianism. *Genetic Psychology Monographs*, 49, 187-230.
- Smock, C. O. 1954. The influence of psychological stress on the "Intolerance of Ambiguity." *Journal of abnormal and social psychology*, 50, 177-182.
- SouEIF, M. I. 1958. Extreme response sets as a measure of intolerance of ambiguity.

- British Journal of Psychology, 49, 329-334.
- 杉山善明. 1979. アイゼンクの性格理論, MPI 研究会(編) 新しい性格検査法, 誠信書房, 1979.
- Tucker, R. C. & Snyder, W. U. 1974. Ambiguity tolerance of therapists and process changes of their clients. Journal of Counseling Psychology. 21, 577-578.
- 吉川 茂 1978. Ambiguity Tolerance と創造性に関する一研究. 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 4, 47-58.
- 吉川 茂 1979. 評定尺度における二分化と Ambiguity Tolerance. 臨床教育心理学研究, 5, 16-21.
- 吉川 茂 1980a. Ambiguity Tolerance の程度と適応性. 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 6, 35-39.
- 吉川 茂 1980b. External Control および Extrapunitiveness としての Externalization と Ambiguity Tolerance. 臨床教育心理学研究, 6, 26-31.
- 吉川 茂 1981. 心理的曖昧さの測定と Ambiguity Tolerance. 臨床教育心理学研究, 7, 25-32.
- 吉川 茂 1982. 知的作業効率に及ぼす Ambiguity Tolerance の効果. 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 8, 9-14.
- 吉川 茂 1984. Ambiguity Tolerance-Intolerance における不安の影響. 臨床教育心理学研究, 10, 7-11.
- 吉川 茂 1984. 青年期の自己開示と Ambiguity Tolerance. 天宗保育専門学校紀要, 1, 133-148.
- 吉川 茂 1985. Ambiguity Tolerance と自己受容および達成動機について. 臨床教育心理学研究, 11, 7-13.
- Zacker, J. 1973. Authoritarian avoidance of ambiguity. Psychological Reports, 33, 901-902.